

三好弥次兵衛筆「香茶棚物図誌」(「香茶棚物寸法之図」)

中野 朋子

一、指物師・三好弥次兵衛の生涯と「余技」

三好弥次兵衛(木屑、一八七四～一九四二)は、祖父・淡路屋弥次兵衛(知新、一八六七没、八〇歳)の代から続く指物師で、その三代目として



三好木屑 (1937年3月撮影)
(「武者小路千家官休庵 愈好斎聴松宗守居士三十三回忌 追福法要茶会記念誌」(1985年)より転載)

家業を継ぎ、「木屑」の号のほかに「木屑軒」「也二」「知孫」などと名乗っている。代々弥次兵衛を襲っていることから、祖父や父との混同を避けるため、本稿では三代目の弥次兵衛を「木屑」の号で呼ぶこととする。

木屑の祖父・知新は、阿州三好郡山城谷郷(現在の徳島県三好市山城谷町、予讃線阿波川口駅の近く)の出身で、文化五年(一八〇八)に大阪間屋橋南(現在の大阪市西区北堀江周辺)で指物細工業をはじめ、のちに大坂城代御用を命ぜられて名帯刀を許されたという名工であった(「郷土名工並助長奨励功労者小伝」(一九三四)による)。明治七年(一八七四)八月に、父・弥次兵衛、母・すみの長男として西区南堀江で生まれた木屑は、明治三十二年(一八九九)四月、父の死去に伴い家督を相続、明治三十五年(一九〇二)五月には京都から河合ヨネ(一八八一～一九二五)を妻に迎え、二女一男をもうけた。また、大正三年(一九一四)には生地の南堀江から北堀江二丁目へ転居し、晩年までこの地で製作を続けたことも確認されている。

木屑は家督相続以降、精力的に指物を製作、各地で開催された博覧会や共進会へたびたび出品し受賞を重ねている。家督相続から間もない明治

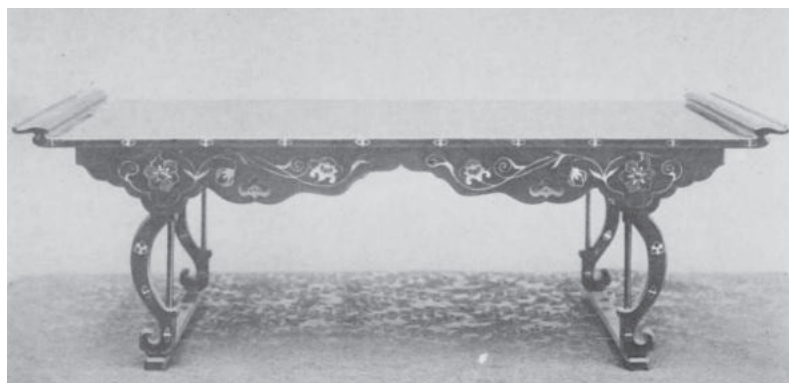
三十六年（一九〇三）には、大阪・天王寺で開催された第五回内国勸業博覧会に「黒檀製木画螺鈿折足卓」を出品、三等賞を獲得した。受賞作の記録写真が残っているが、その折足卓は、正面部分には鉄線唐草文、足には花弁らしき文様を施した作品であったようだ。

木屑といえ、指物を家業としながらもじつに幅広く芸道の修養を積んだことで知られ、茶道・煎茶・書画・和歌・漢詩・俳句などを挙げることができる。幼少期から学んでいた漢詩の師は三重県伊賀出身で大阪朝日新聞の記者も務めた磯野秋渚（一八六二〜一九三三）で、木屑は折々に本格的な漢詩を詠じているのは、その研鑽の証であろう。

茶道は壮年時代に三代木津宗詮（聿斎・宗泉、一八六二〜一九三九）に入門して武者小路千家官休庵流の稽古をはじめ、のちに京都の家元へも通って指導を受けている。武者小路千家十二代家元・愈好斎聴松（一八八九〜一九五三）は木屑の人となりや仕事への取り組み方について「其風体は古来の大阪職人そのままであったが、其人となりは今人何ぞと云ふと理屈や議論やらで無理に芸術家気取りである人々とは大違ひで、腹からの芸術家であった」と評し、これは木屑が「常に美的創意を産み出す芸術的作品を作り、堂々たる見識を抱いてゐたから」であり、こうした見識を磨く根底には木屑自身の素質もあるが、それ以上に重要なことは「種々他の芸術に精進して其素質を愈々向上せしめ、高き気品を醗酵する事に励めた」ためと指摘している。このように愈好斎によつて高い芸術性を認められた木屑は、愈好斎好みの道具製作も多々手がけていた。そして同流の職方のひとりとして認められていたが、昭和十四年（一九三九）の夏に脳溢血で倒れて療養ののち、昭和十七年（一九四二）十月三日に歿した。

木屑の仕事で特筆すべきは、指物師でありながら髹漆、蒔絵などの漆作

品の製作に積極的に挑み、成功させたことにあるだろう。柴田是真（一八〇七〜一八九二）の砂張塗を模した砂張盆は木屑の「余技」を代表する品であり、また当時の数奇者たち



第五回内国勸業博覧会で三等賞を受賞した黒檀製木画螺鈿折足卓
高さ7寸5分（約22.5cm）、長さ1尺3寸（約39cm）、
幅2尺3寸（約69cm）
（国立国会図書館デジタルコレクション
『第五回内国勸業博覧會美術館出品目録』（1903年）より転載）

ちが所蔵した数々の名物道具を漆作品として「写す」ことを試みてもいる。木屑の手がけた指物や「余技」の漆作品には佳作も多く、その圧倒的な出来映えから評価を高め、昭和六十年（一九八五）に愈好斎の三十三回忌追福法要茶会が京都・大徳寺において盛大に執り行われた際には、大徳寺塔頭のひとつ玉林院に木屑作品を展示する展観席が設けられたほどである。

二、「香茶棚物図誌」と平瀬露香

本稿で紹介する「香茶棚物図誌」（個人蔵、別名「香茶棚物寸法之図」。以下「図誌」と呼ぶ）の奥書には次のようである。

浪華平瀬氏御所蔵香茶棚物寸法之図

計八拾六枚 内附属之図拾七枚

自明治三十五年十月 指物師 三好知孫

至三十六年十一月而成

奥書によると、第五回内国博開催の前年にあたる明治三十五年十月から翌三十六年の十一月までの十三ヶ月をかけて採寸記録された図誌で、大阪の両替商千草屋の当主・平瀬亀之輔（一八三九～一九〇八）が所蔵する、「香」道、「茶」道に関わる棚物の調査記録として「香茶棚物寸法之図」八十六図が作成された、ということになる。史料名については、奥書に「香茶棚物寸法之図」とあるが、本稿では表紙の記載から「香茶棚物図誌」とした。また本稿では、木屑によって付された番号をもとに同史料の明細リストを作成するとともに、一部については写真を掲載しているので参照していただきたい。

この図誌の製作に関しては、平瀬の別家に生まれ、阪急百貨店美術部顧問を務めた中井浩水（新三郎、一九五九没、七十八歳）が「大阪近世の名匠 木屑軒也二」（『美術・工藝』昭和十八年一月号（通巻第十号））のなかで、露香自身が家に伝来する名物棚の図誌作成を思い立ち、某氏の推薦によって二十歳代後半の木屑に作成を依頼したと記している。某氏とは木屑の絵の師匠とも、木津宗泉と戸田露朝（一八六七～一九三〇）のふたりともいわれているが定かではないらしい。そしてここで注目されるのは、何故、露香が図誌作成を企図したのかという点になるだろう。

木屑によって図誌が作成された明治三十五年から三十六年十一月は、平

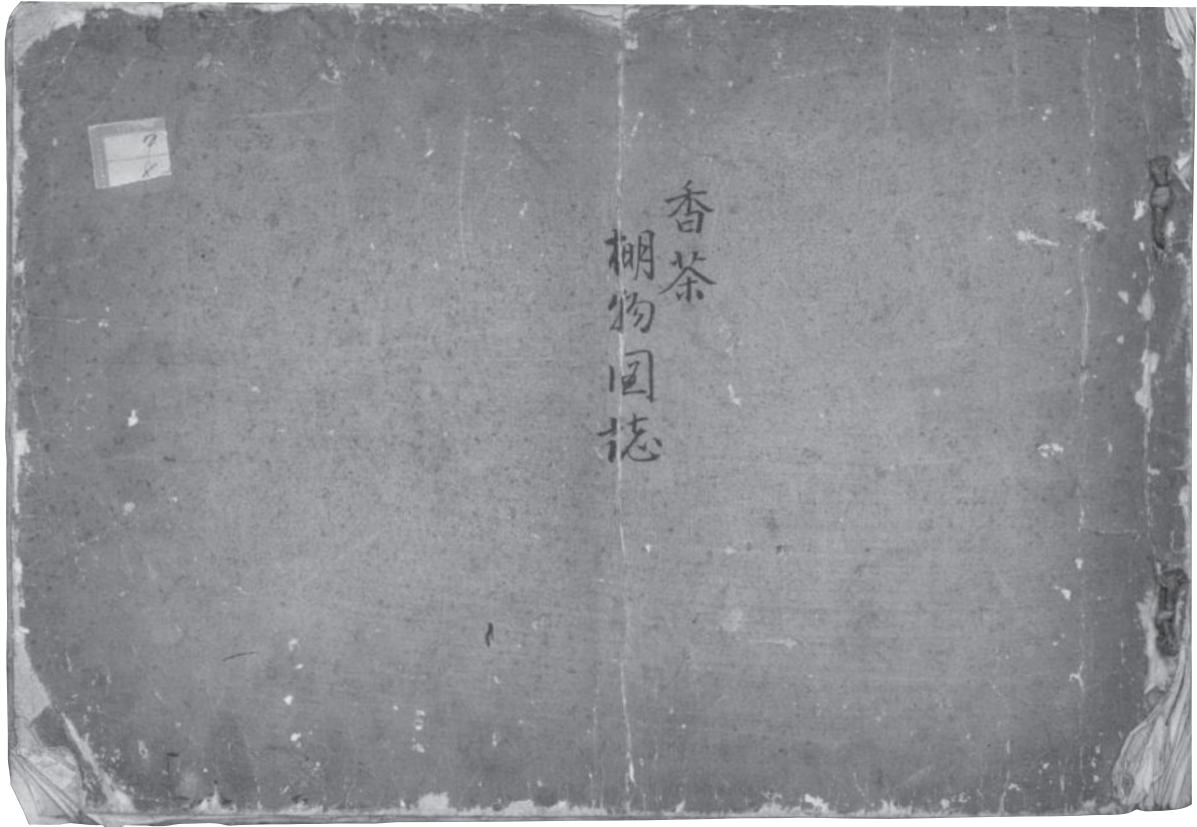
瀬家が明治期以降の家業の損失を補填するために明治十九年、三十六年、三十九年と三度にわたって道具売立を行った第二回入札の準備から開催の年にあたることに注目しておきたい。三十六年開催の第二回入札においては青井戸茶碗「柴田」などが想定外の高値をよんだことよって「平瀬相場」とまで呼ばれる成功を収めた。しかしながら、稀代の道具蒐集者であった露香にとつて、家業損失の補填のためとはいいながら、家伝の、あるいは自ら蒐集した道具を売立で失うことのやるせなさも払拭することが出来なかつたのではないか。そこで、家伝のあるいは自身が蒐集した道具の図誌作成を企図したのではないだろうか。図誌掲載の棚物がいつ平瀬家を離れたのかについては今後慎重に検討する必要があるが、図誌製作の背景には、こうした露香の心構えがあつたものと考えられる。同時に、この図誌はのちに木屑の指物製作に大いに活かされたものと推察され、実際に木屑は水指棚や分銅棚など複数の棚の写しを製作したことも確認されている。

〔参考〕

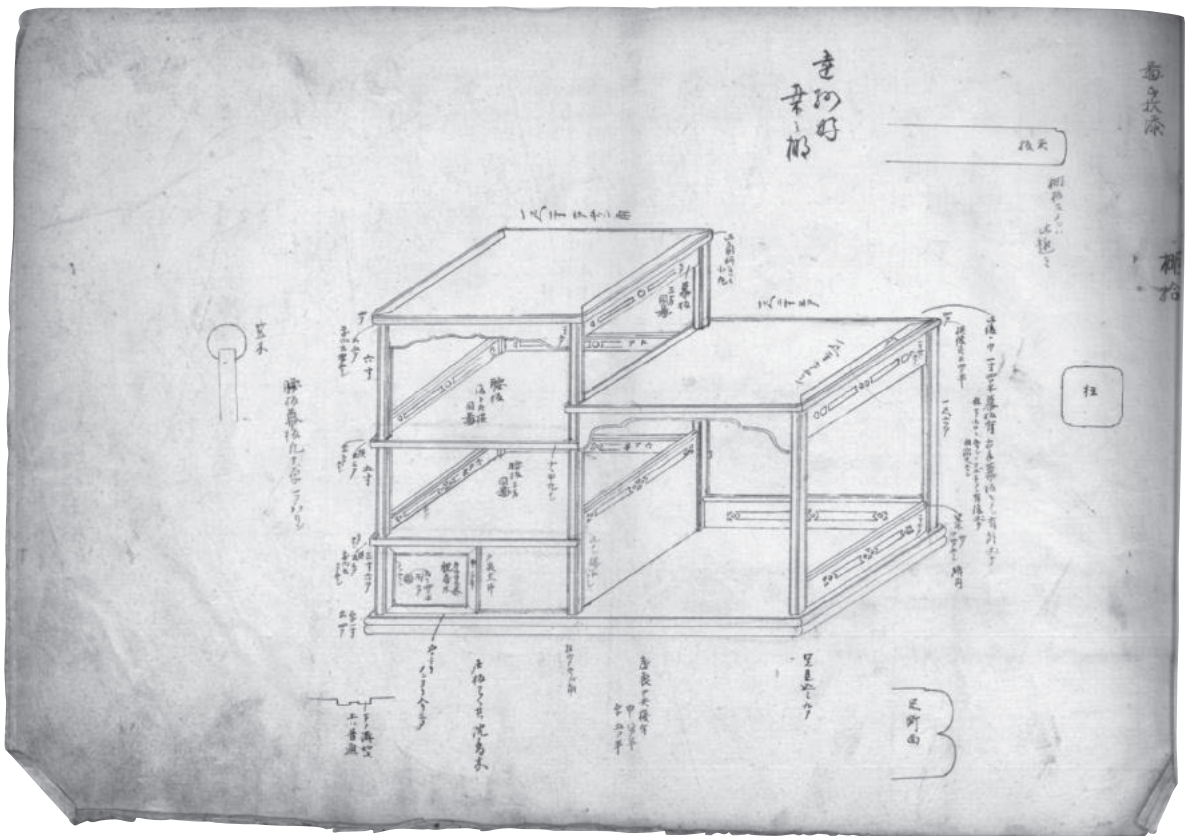
- ・大阪府工芸協会「郷土名工並助長奨励功労者小伝」（一九三四）
- ・第五回内国勸業博覧會事務局編『第五回内国勸業博覧會美術館出品目録』（一九〇三）
- ・千宗守「風興思記」〔雑誌「武者の小路」第七年第十号（一九四二）ならびに第八年第二号（一九四三）〕
- ・武者小路千家官休庵 愈好斎聴松宗守居士三十三回忌 追福法要茶会記念誌（一九八五）
- ・中井浩水「大阪近世の名匠 木屑軒也二」（『美術・工藝』昭和十八年一月号（通巻第十号、一九四三））

表 「香茶棚物図誌」(「香茶棚物寸法之図」) 明細

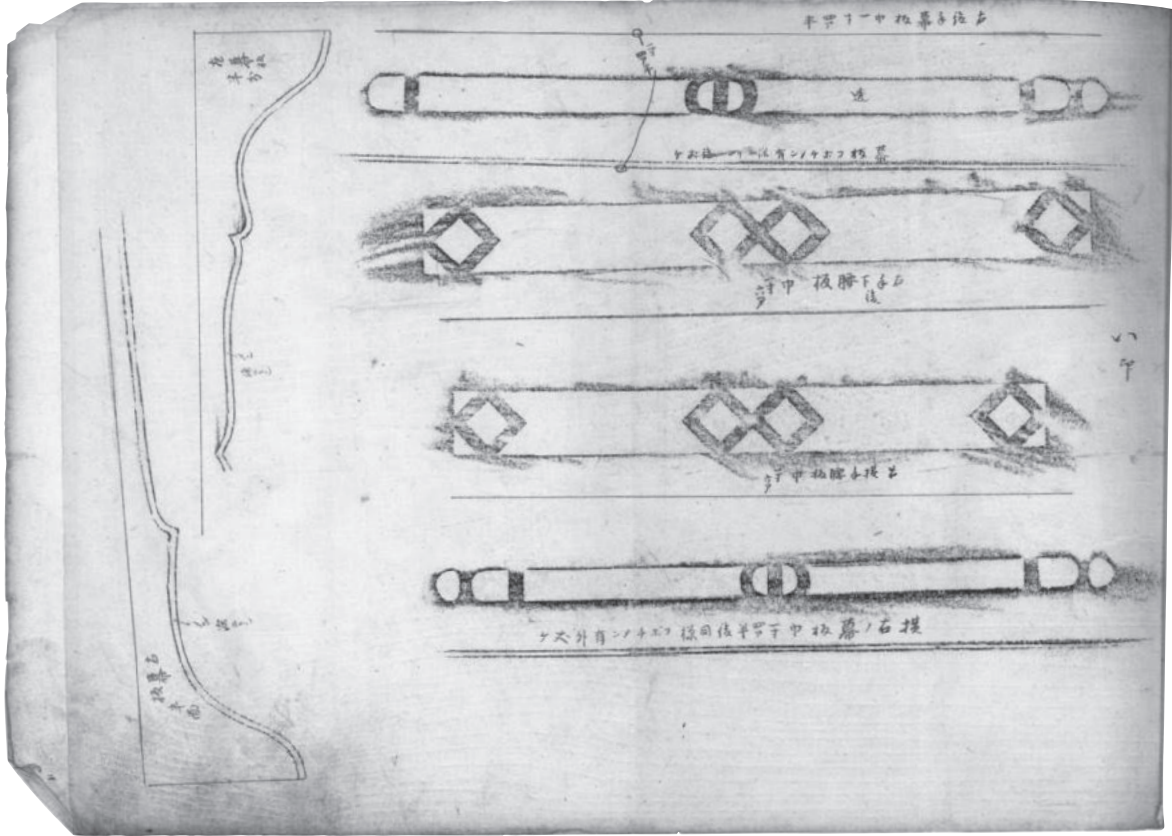
番号	掲載内容	図版掲載	番号	掲載内容	図版掲載
表紙	香茶棚物寸法之図	○	44	桐品川棚 利斎之作	
1	遠州好桑之棚	○	45	石州好水指棚 春慶ぬり	
2	(詳細) 幕板寸法	○	46	小堀家伝来四本柱ノ棚	
3	(詳細) 地板の透模様	○	47	(詳細) 彫刻の図	
4	大円庵不昧居士遺什	○	48	利休好桐四方棚	○
5	(詳細) 棚板の透模様	○	49	石州好桐車棚	○
6	(詳細) 地板、腰板の透模様	○	50	遠州好団扇二重棚	
7	(詳細) 足の形、細透、七宝透	○	51	直斎好桐香座間棚	○
8	遠州好志野香棚		52	直斎好妙喜庵ノ卓	○
9	(詳細) 棚側面の透模様		53	(詳細) 金蒔絵の図	○
10	利休好筋違棚	○	54	(詳細) 天板裏の烙印、書付	○
11	宗和好袋棚 桐		55	黒漆いろ塗 飴溜志野香棚	
12	一綴斎好桐自在棚		56	桑袋棚 志野家香棚 雑賀半左衛門作	
13	桐烏帽子棚		57	赤溜ぬり引払棚	
14	松花堂軒持器局 黒塗		58	判紋竹煎峯棚	
15	(詳細) 前の戸の模様		59	直斎好竹ノ袋棚 竹柱紹鷗棚	
16	(詳細) 後の模様		60	桑志野棚	
17	(詳細) 右横の模様		61	(詳細) 台の前の形、横の網透、戸袋の青貝細工模様	
18	(詳細) 左横の模様		62	段棚 指物師 松井長以	
19	甫公好春慶棚		63	珠光之竹台子 桐 奈良松屋源三郎伝来/後鴻池所有/後平瀬氏御蔵トナル	○
20	時代二重袋付蒔絵棚		64	直斎好竹柱桐四方棚	
21	和歌 あし鳥棚		65	一綴斎好梅棚 指物師 市郎兵衛	
22	蒔絵桑ノ袋棚		66	赤春慶ぬり桐笈棚	
23	桑山宗仙竹棚		67	(詳細) 背面板の模様	
24	一綴斎好壺ノ棚		68	黒漆いろ刷毛目 二重棚	
25	(詳細) 壺ノ模様		69	春慶塗 宗仁棚	
26	遠州桑之糸巻棚 木地	○	70	芝火棚	
27	紹鷗棚 檜木春慶塗		71	利休所持 机案	○
28	直斎好桐袋棚		72	利休所持桑脇息 左甚五郎作 今日庵伝来	○
29	光悦好 杉柱之棚		73	(詳細) 天板半ノ図、足ノ図	○
30	宗和好 桑水指棚 すり漆	○	74	桐旅卓 指物師 竹林三右衛門	
31	(詳細) 背面の空き、隅板の形状	○	75	石臺子 ろいろ塗	
32	黒漆唐物棚 金具モール		76	桐丸卓 本名丸香臺 指物師 市郎兵衛	
33	黒漆夕顔棚		77	真ノ臺子 古宗哲造	
34	(詳細) 棚板、柱の形状		78	遠州好桐分銅棚 指物師 竹林三右衛門	○
35	桐四方棚		79	桑ノ水指棚	
36	桐矢筈棚		80	(詳細) 後板ノ透シほか	
37	利休好山里棚	○	81	(詳細) 後下ノ腰透シほか	
38	遠州好水指棚	○	82	孤篷庵伝来	
39	直斎好青漆梅棚		83	総槻木 柱八黒柿	
40	桐分銅棚	○	84	(詳細) 後ノ腰透シほか	
41	遠州好桑志野棚	○	85	桑丸香棚	
42	(詳細) 腰板の模様	○	86	桐直斎好 竹ノ袋棚 桐竹柱紹鷗棚	
43	(詳細) 腰板の模様	○	裏表紙裏	書誌情報	○



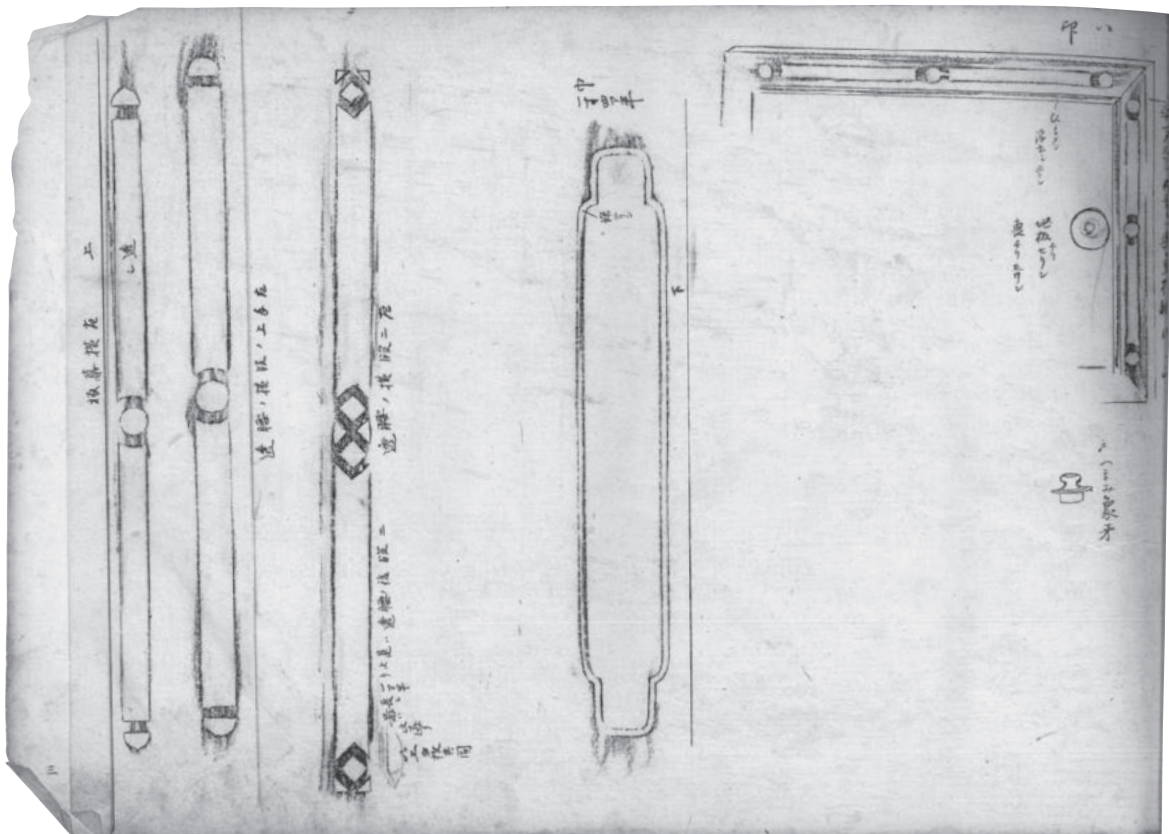
表紙 香茶棚物寸法之図



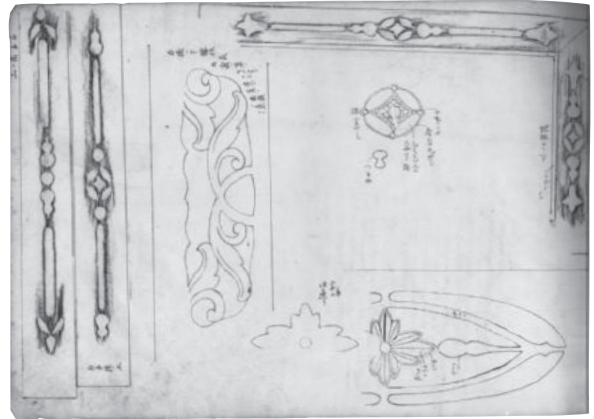
1 遠州好桑之棚



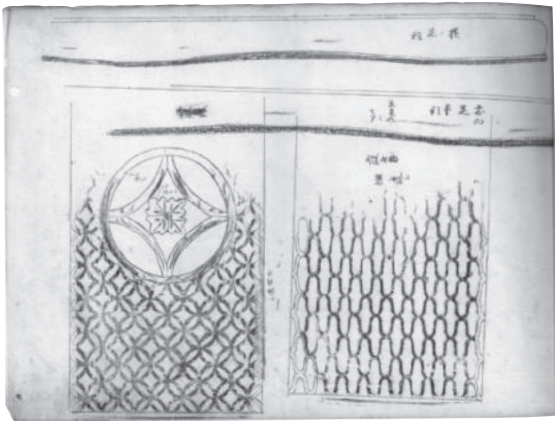
2 (詳細) 幕板寸法



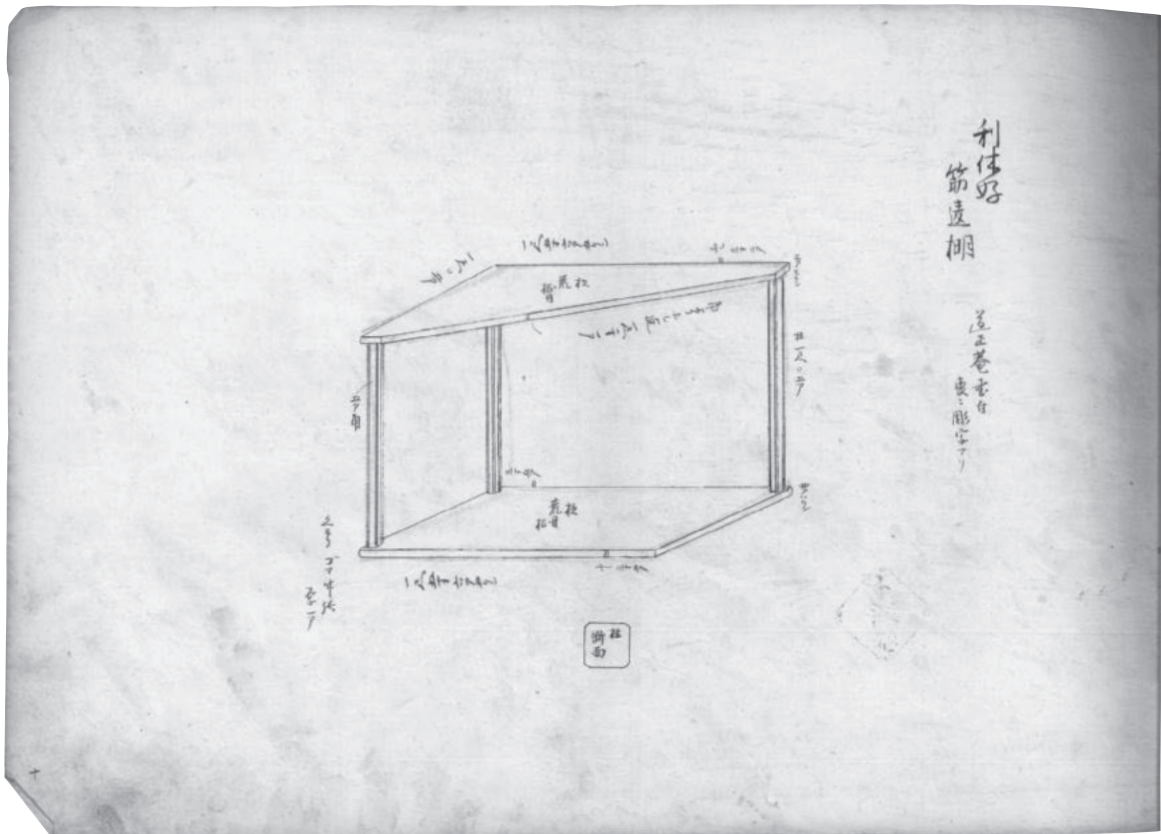
3 (詳細) 地板の透模様



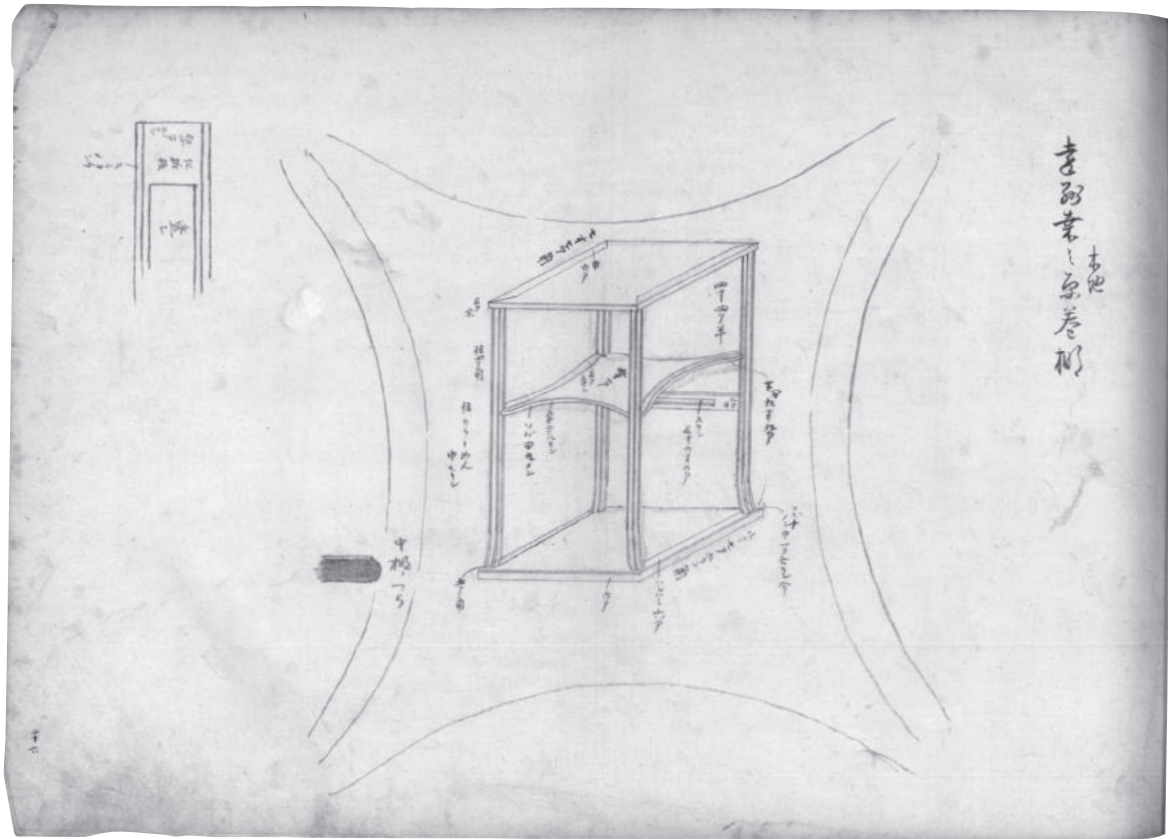
6 (詳細) 地板、腰板の透模様



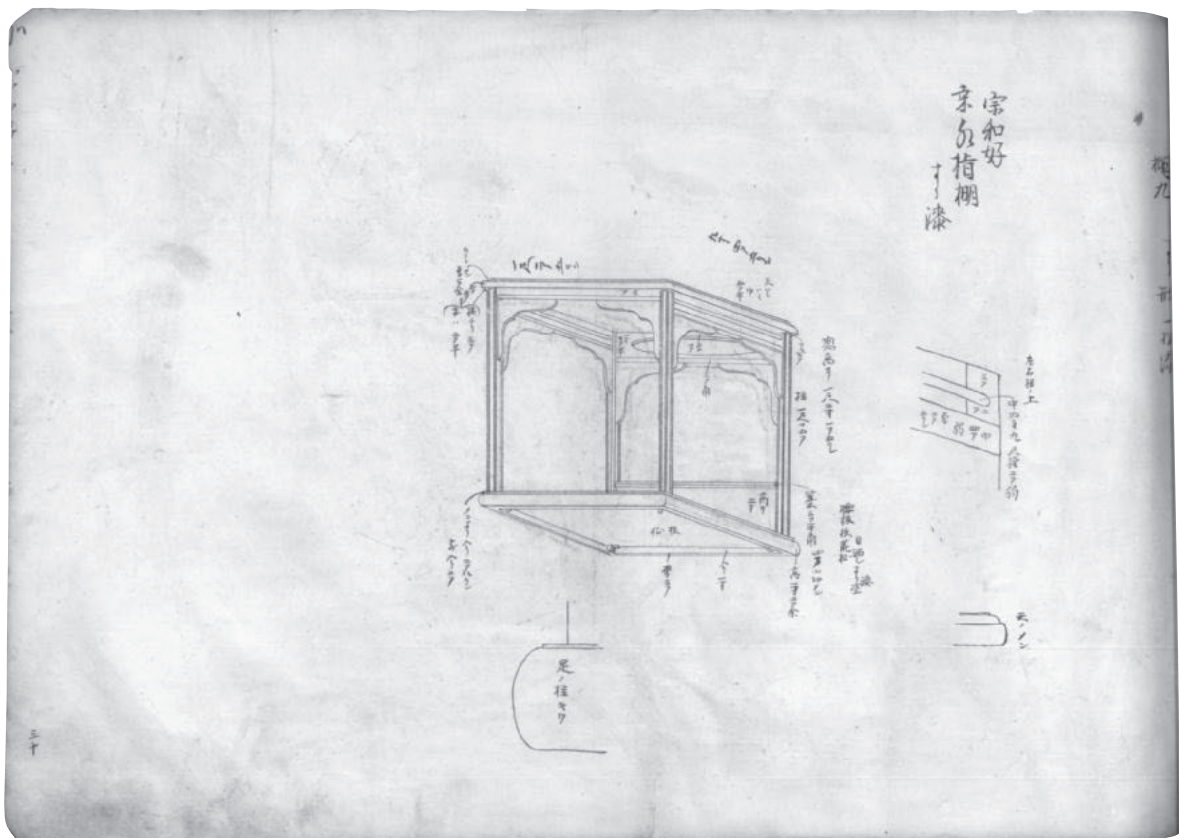
7 (詳細) 足の形、細透、七宝透



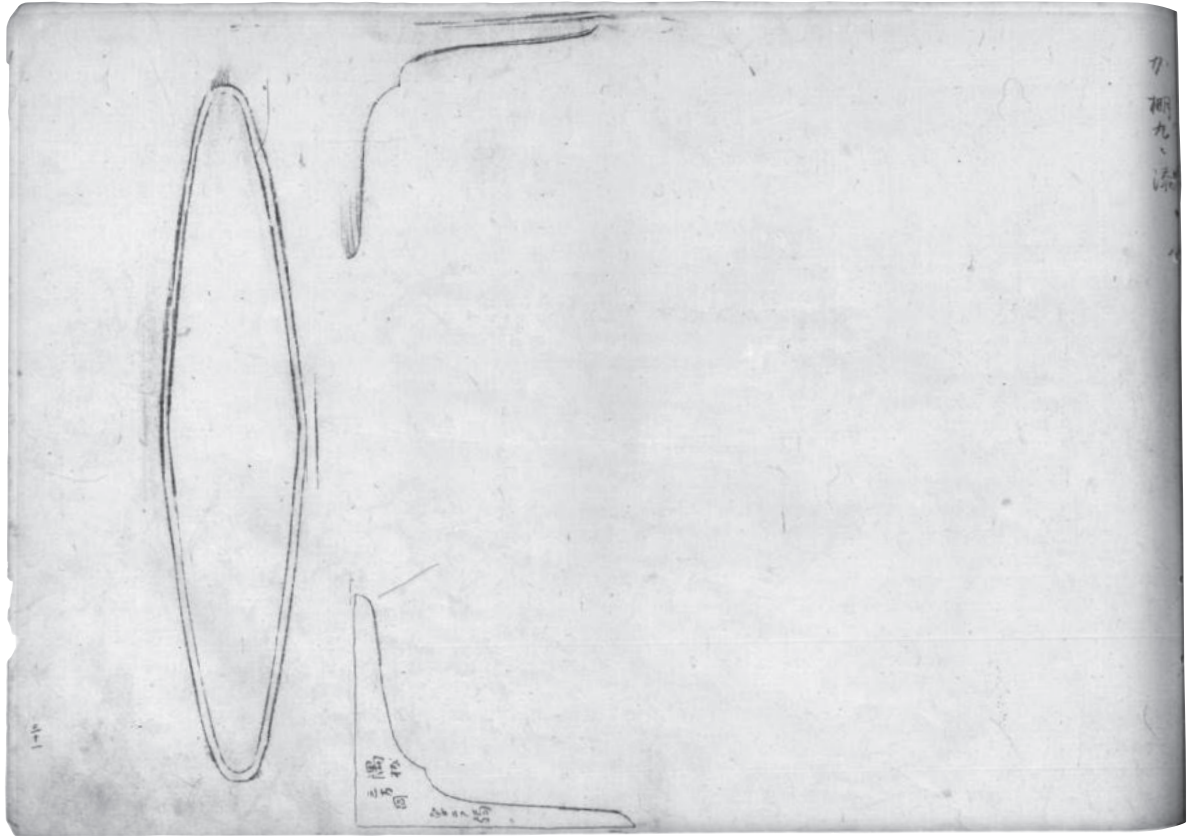
10 利休好筋違棚



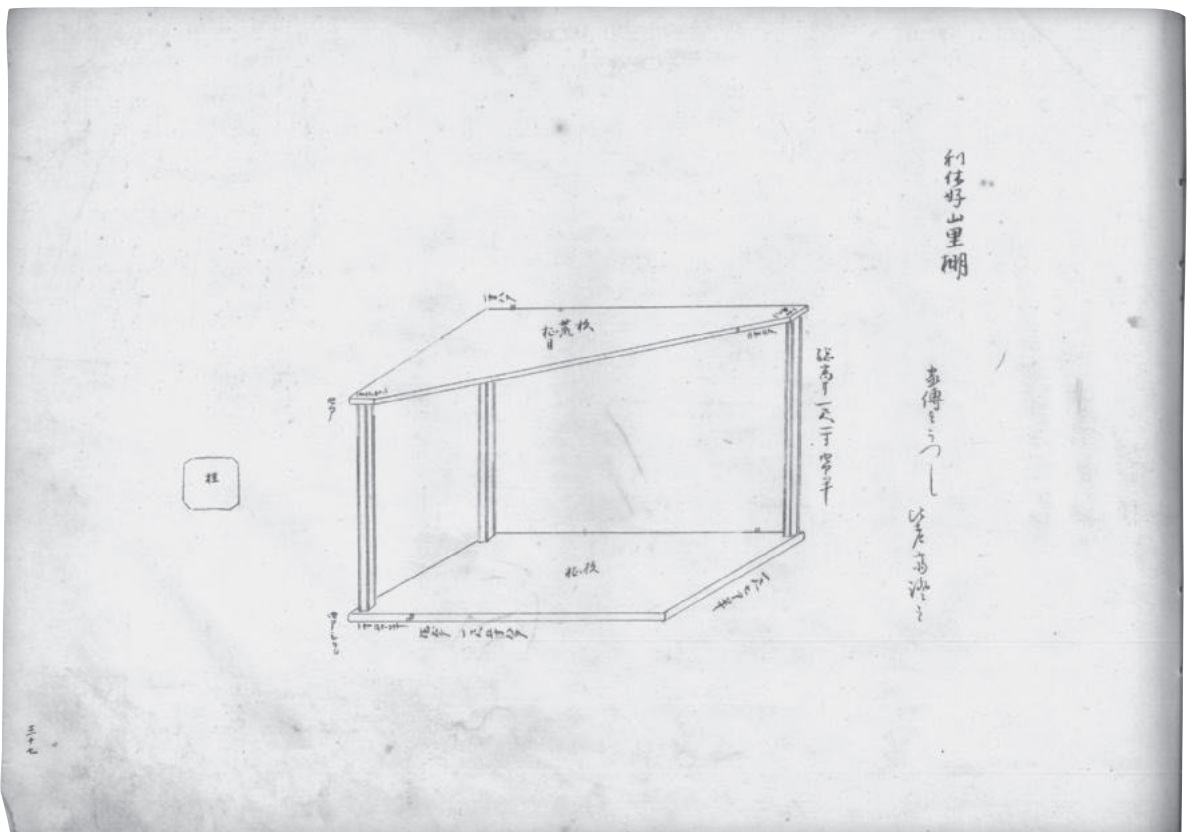
26 遠州桑之糸巻棚 木地



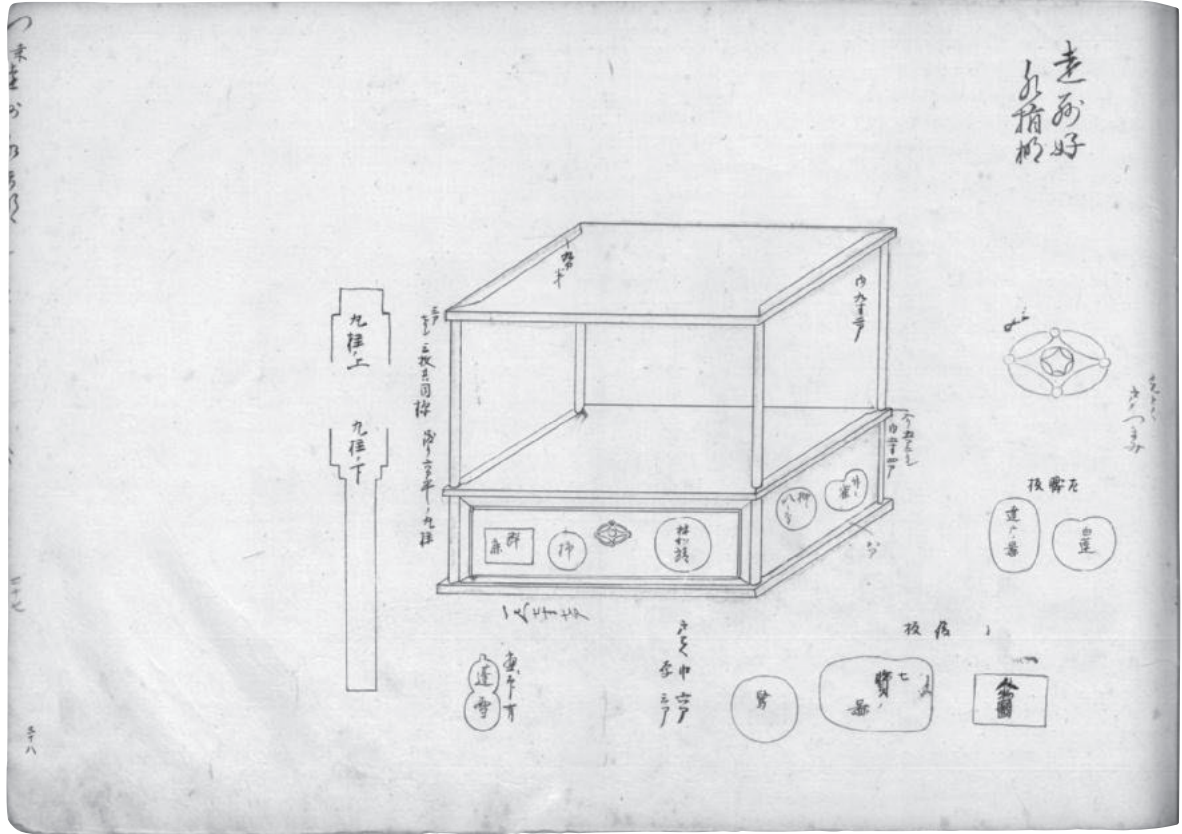
30 宗和好 桑水指棚 すり漆



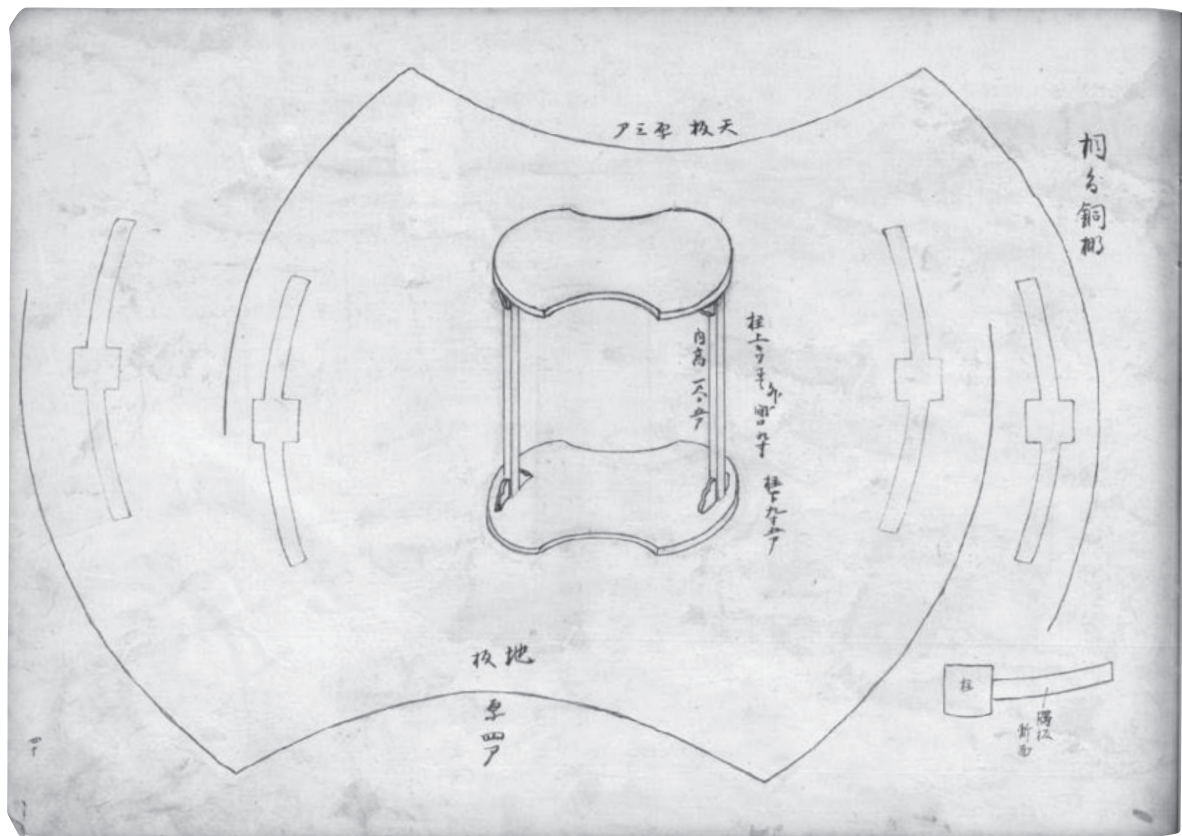
31 (詳細) 背面の空き、隅板の形状



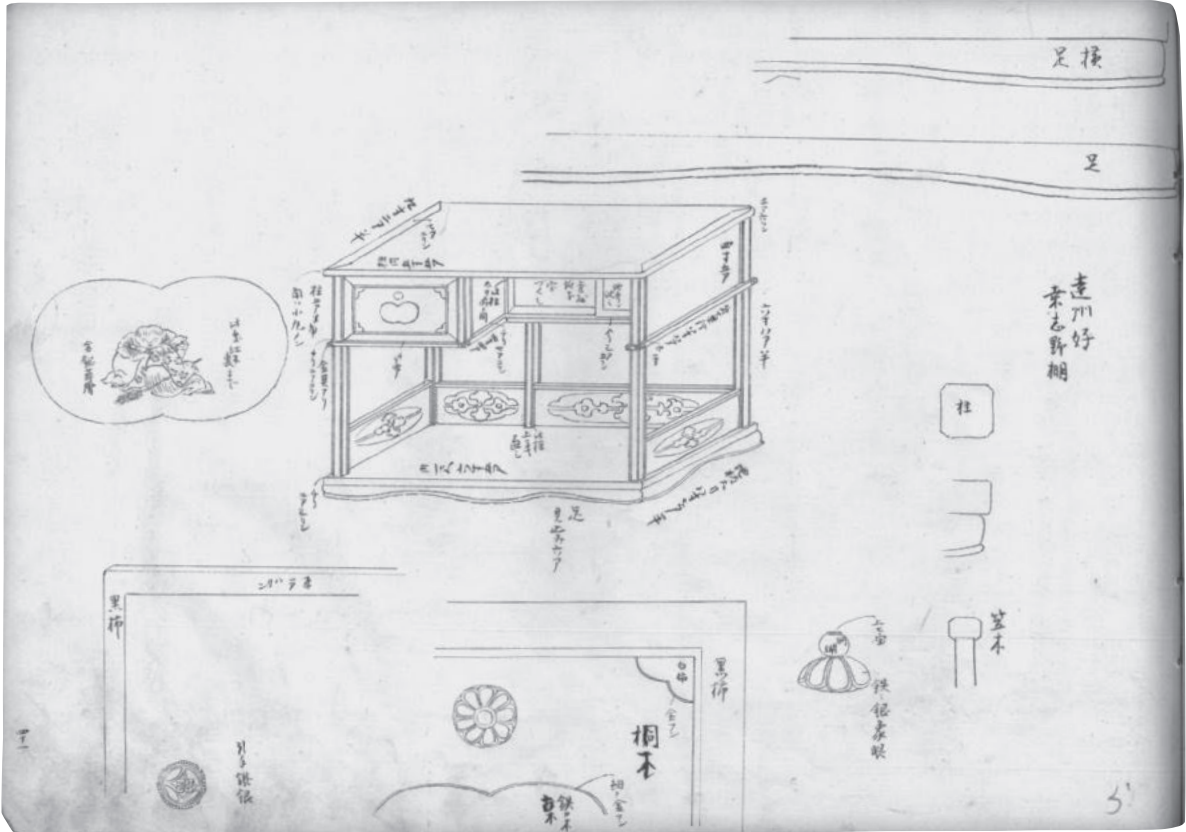
37 利休好山里棚



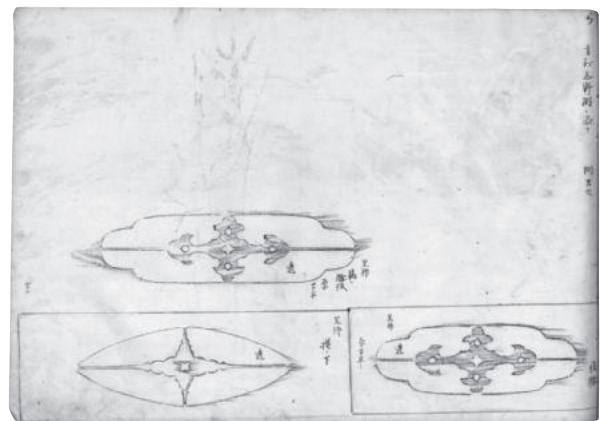
38 遠州好水指棚



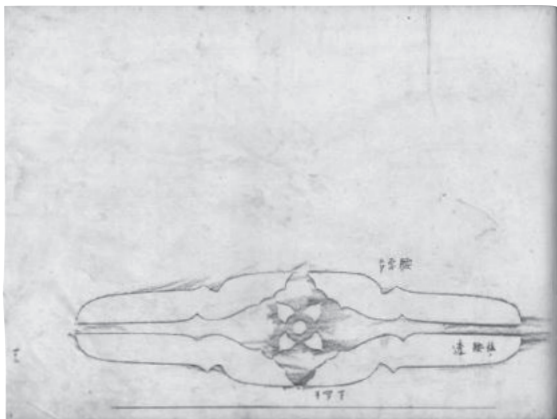
40 桐分銅棚



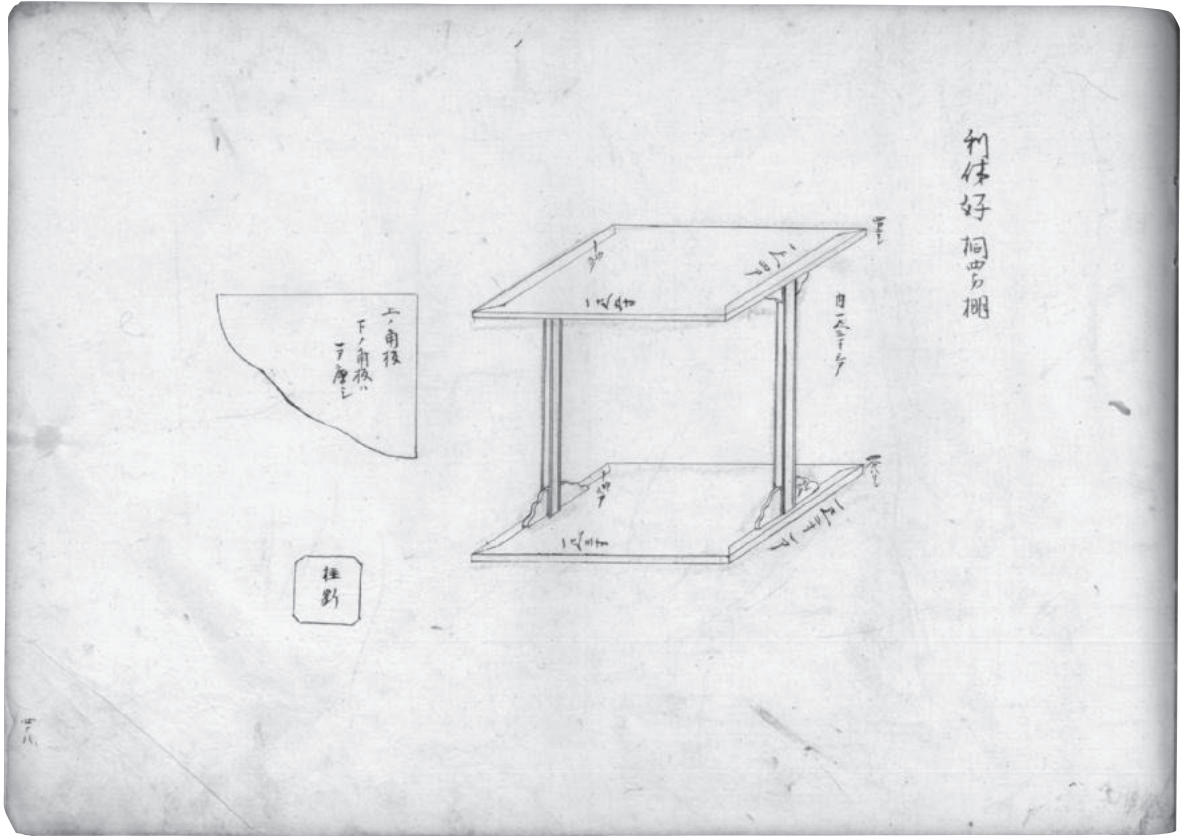
41 遠州好桑志野棚



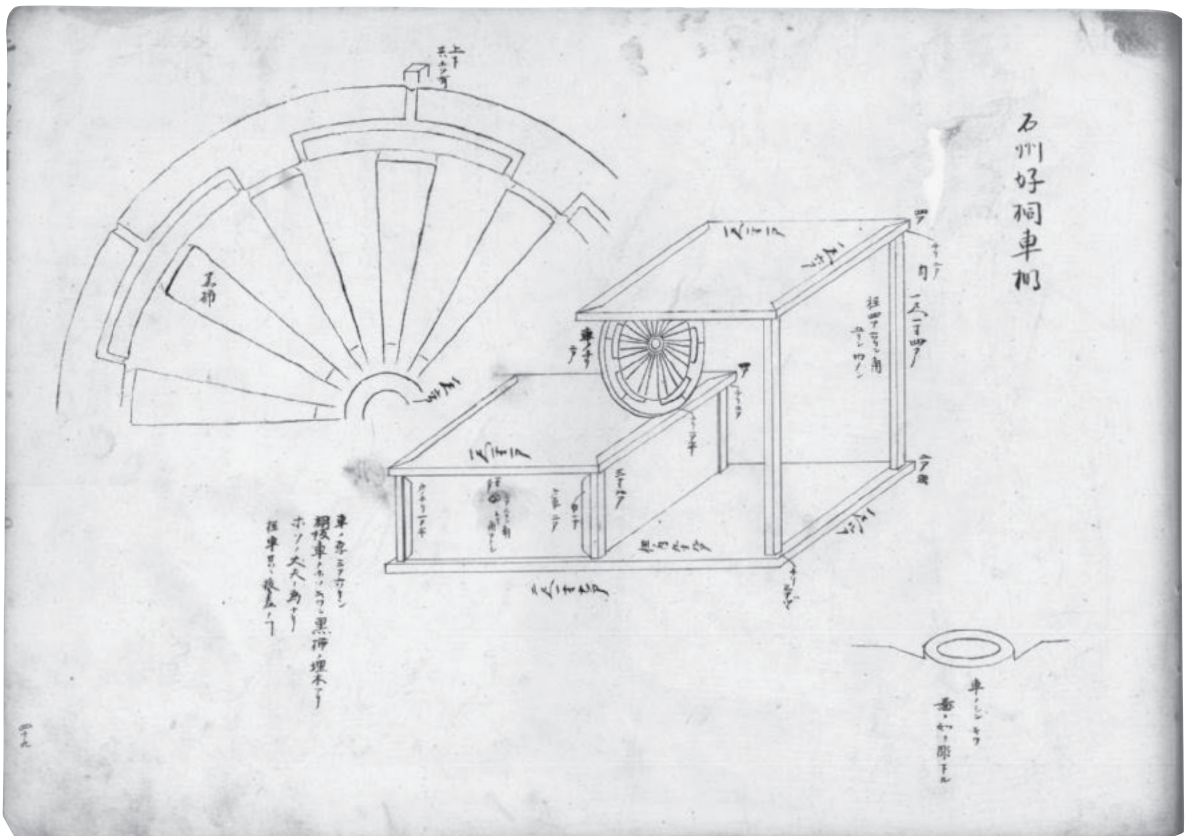
42 (詳細) 腰板の模様



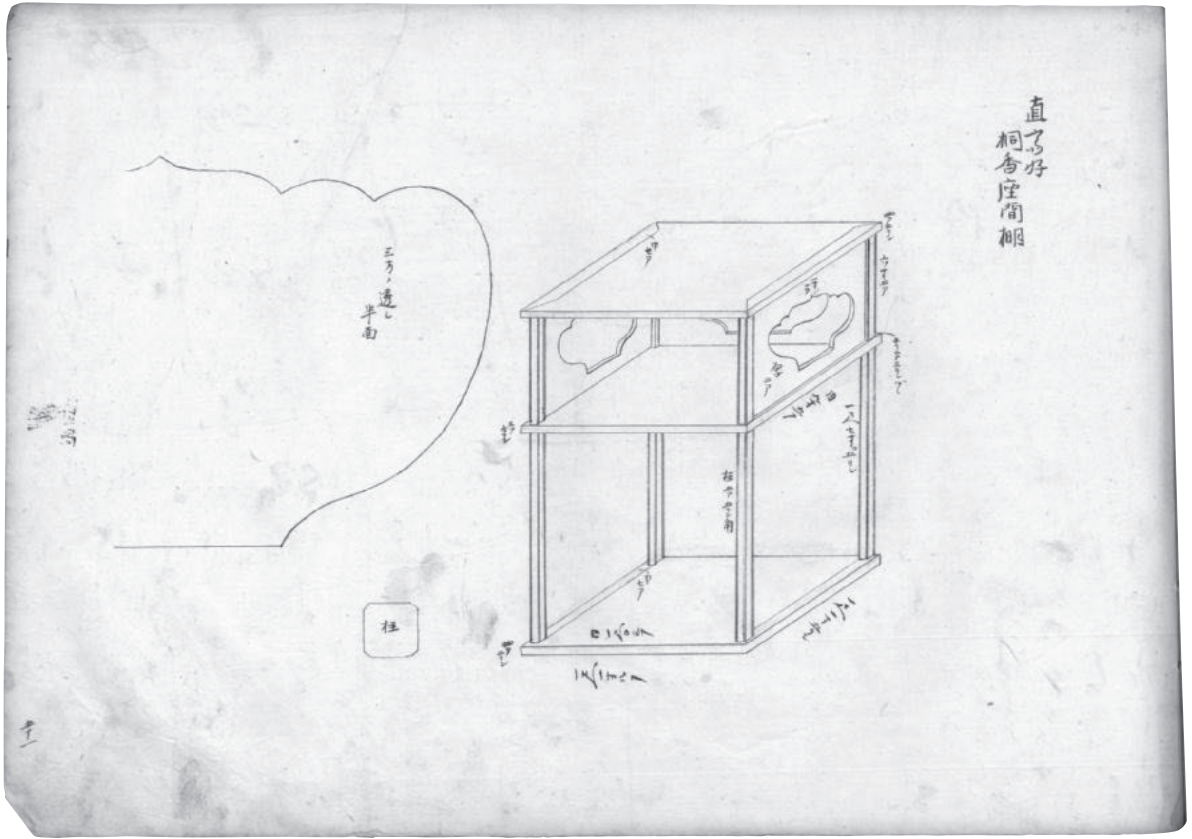
43 (詳細) 腰板の模様



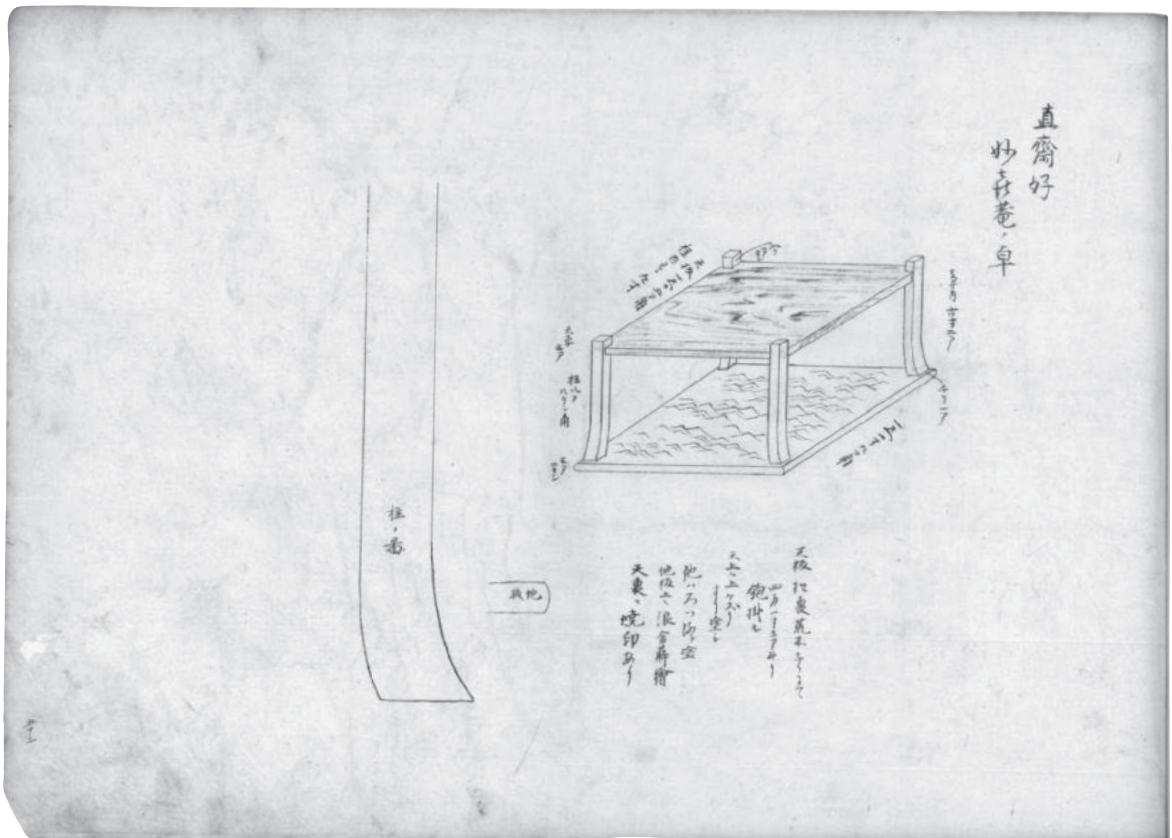
48 利休好桐四方棚



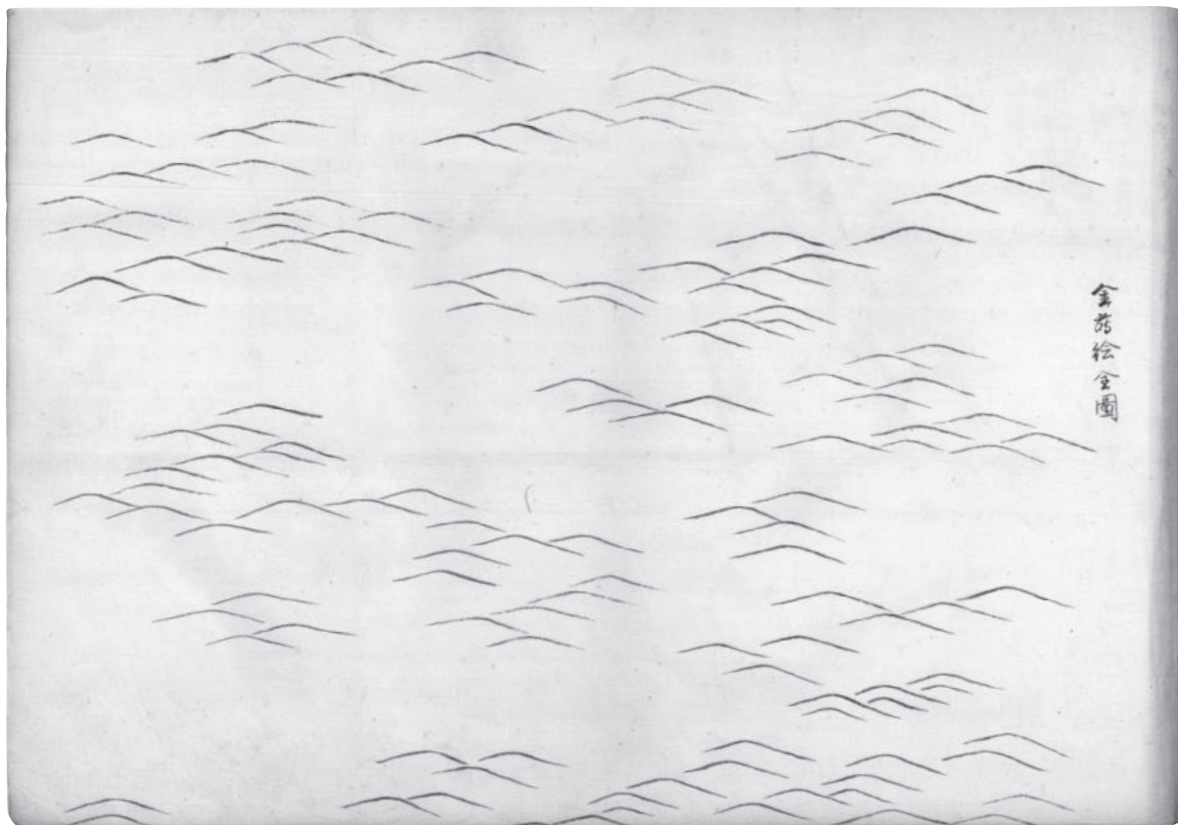
49 石州好桐車棚



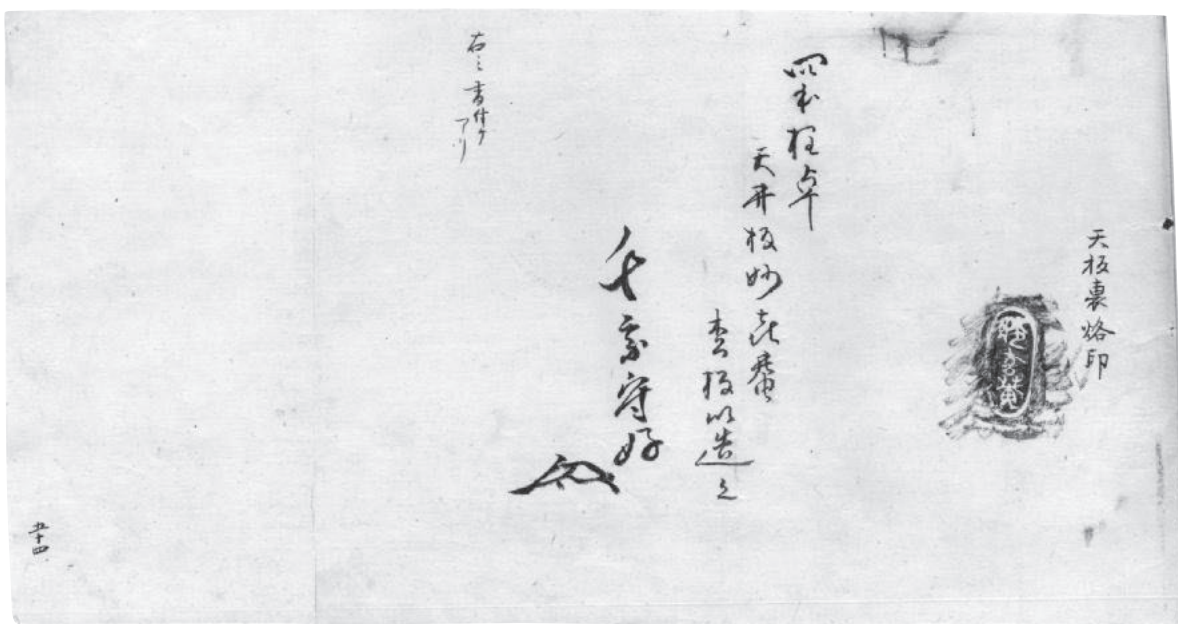
51 直斎好桐香座間棚



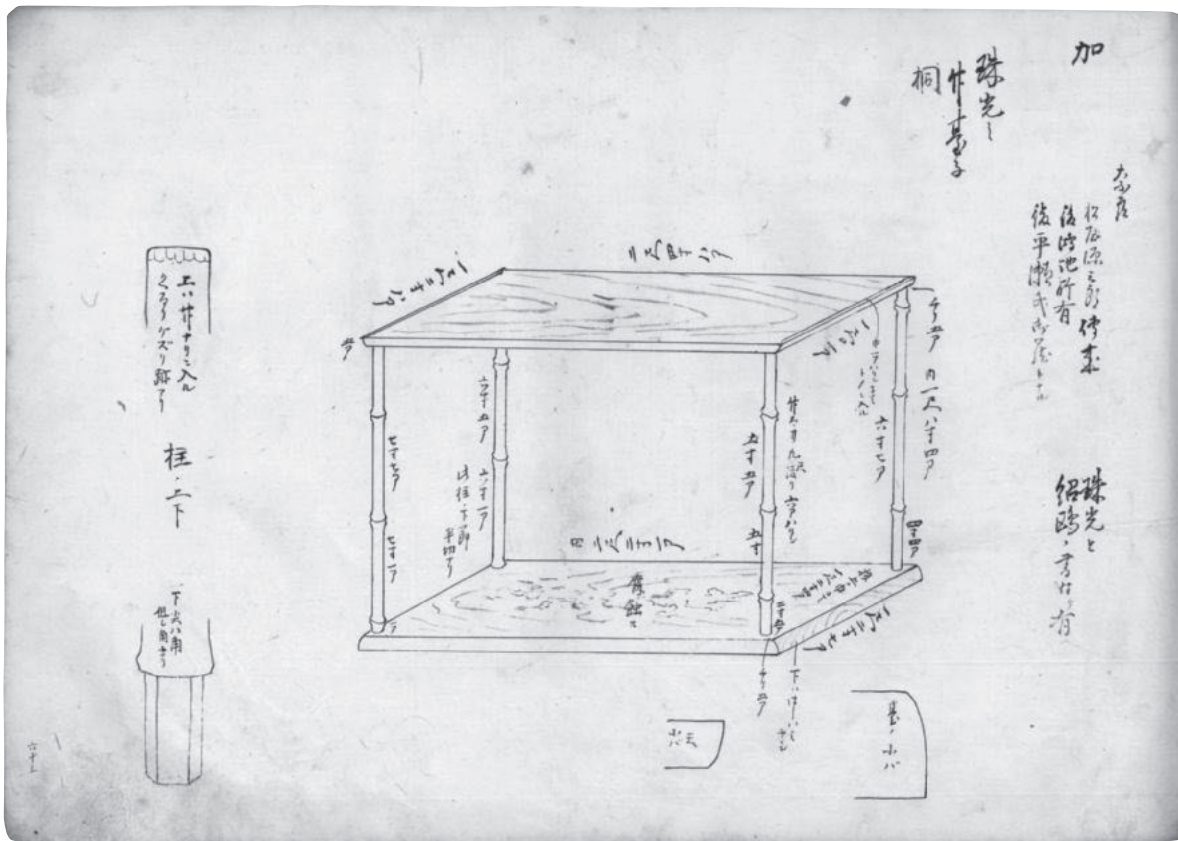
52 直斎好妙喜庵ノ卓



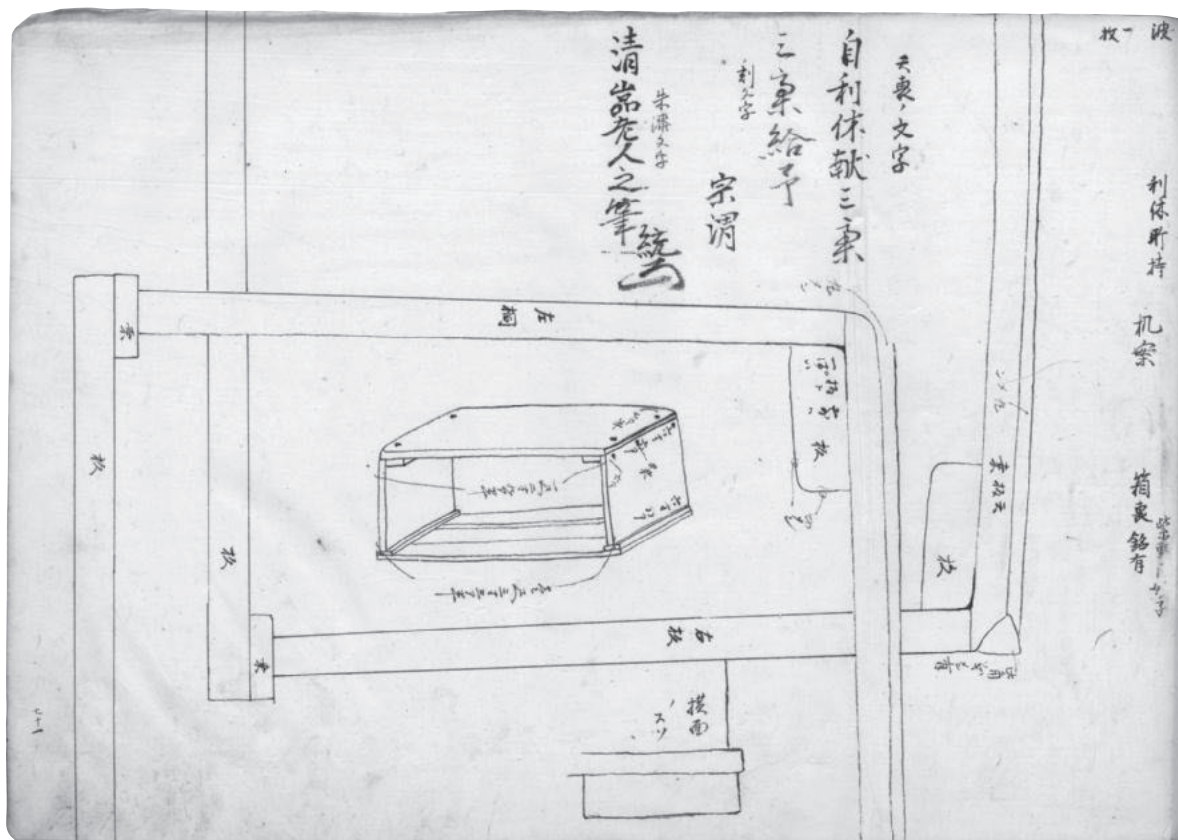
53 (詳細) 金蒔絵の図



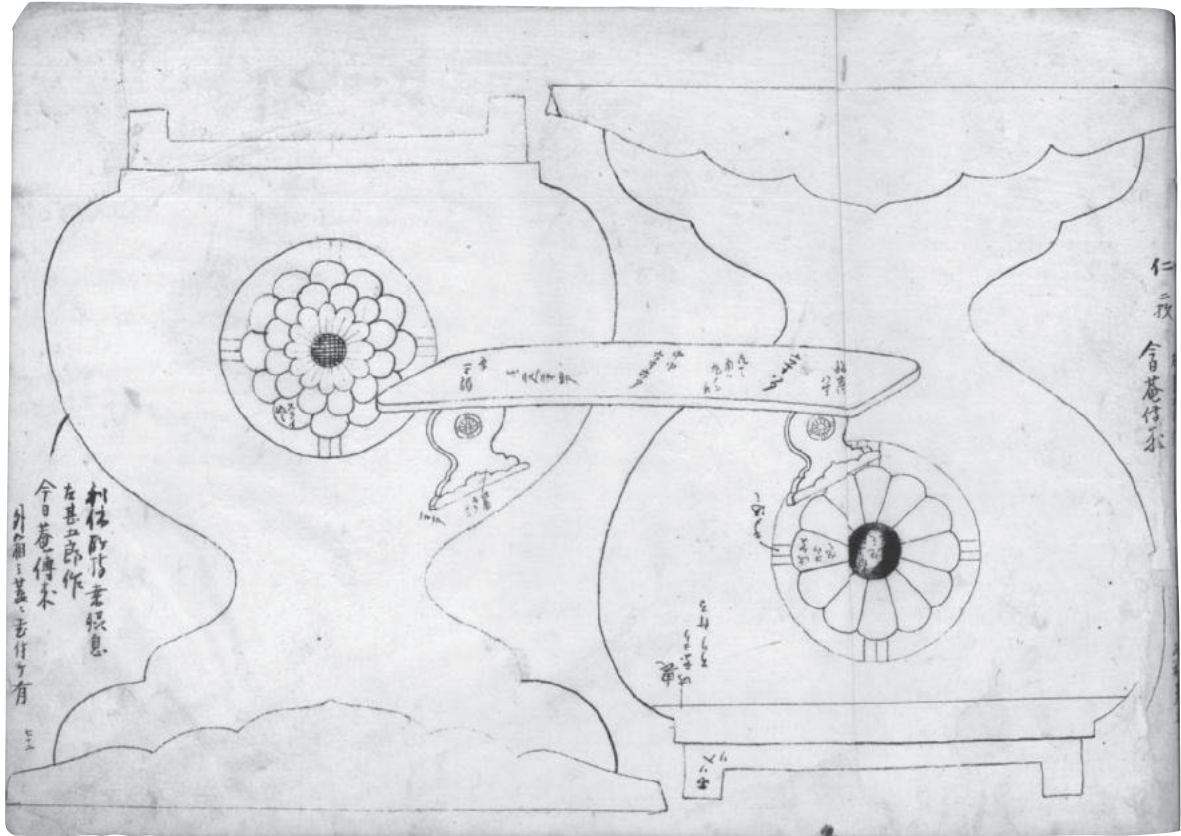
54 (詳細) 天板裏の烙印、書付



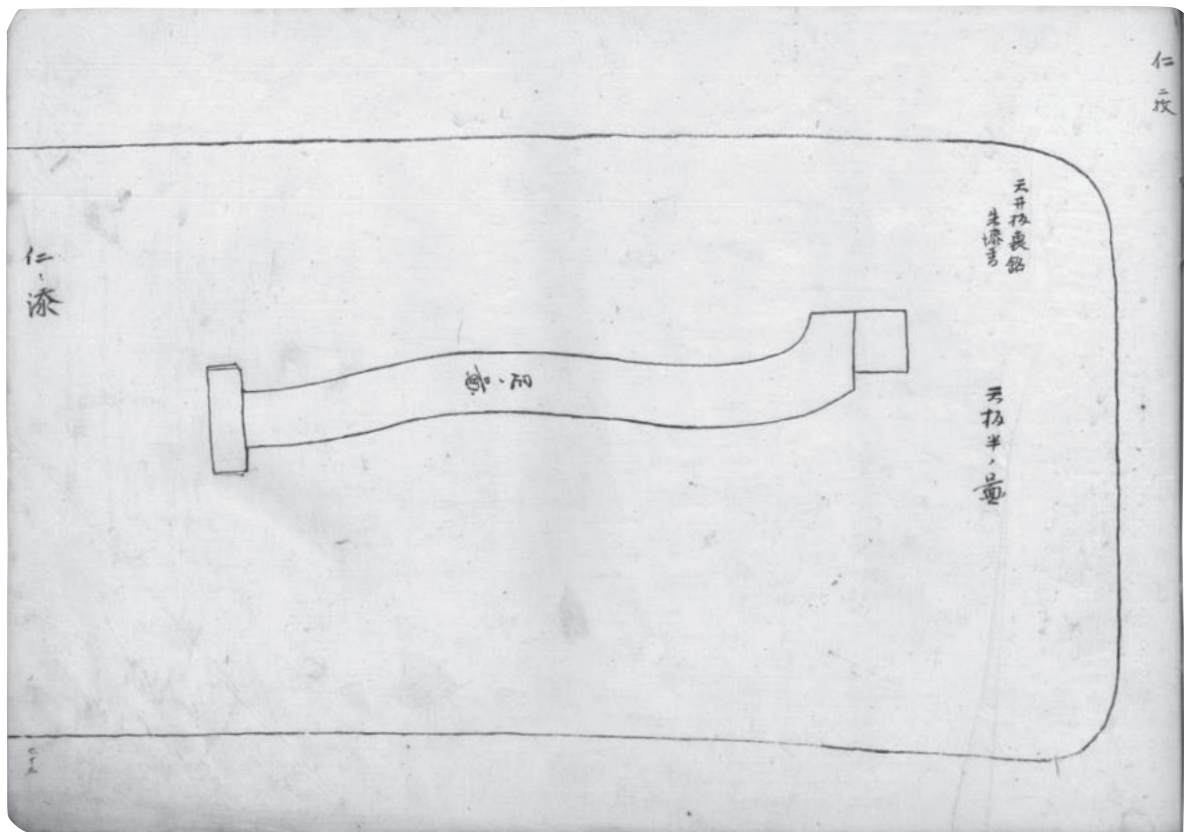
63 珠光之竹台子 桐



71 利休所持 机案



72 利休所持桑脇息 左甚五郎作 今日庵伝来



73 (詳細) 天板半ノ図、足ノ図

